

追分石小考

佐藤 仁

(一)

江戸時代の面影を今に良く伝えるものに、街道並木や追分石がある。前者は何百年の風雪に堪えて来た、強い幹・見事な技ぶりなど華やかな歴史の感銘を与え、後者、追分石は地味な存在ではあるが苔むした風情の中に、なほ昔と変らぬ道標の役割を果している例が多い。

津軽地方の主要街道について追分石の分布を調査した結果は別表で追分石一覽に見られる二十三基に及んだ。石の現存は地上一米位の高さのものが大部分で他地域に見る如き巨大な例は無く、自然石に文字を刻み込んだ粗末なものが多い。碑面の文字は地名、街道名、信仰に関する文章、經文、建設者名、建設年月日等、これ等諸項目を整理検討する時津軽地方における交通事情や民衆生活の一端を知ることが可能である。

(二)

まず追分石の分布から考察してゆくと、地域別には青

森、弘前、黒石、鯉ヶ沢等津軽領の主要都市周辺一、二里程度の地帯に多く五所川原を中心とする新田地帯には見出す事が出来なかつた。一方街道別に置き換えると、

(1) 碓ヶ関―鯖石―黒石―本郷―浪岡―大豆坂―青森間

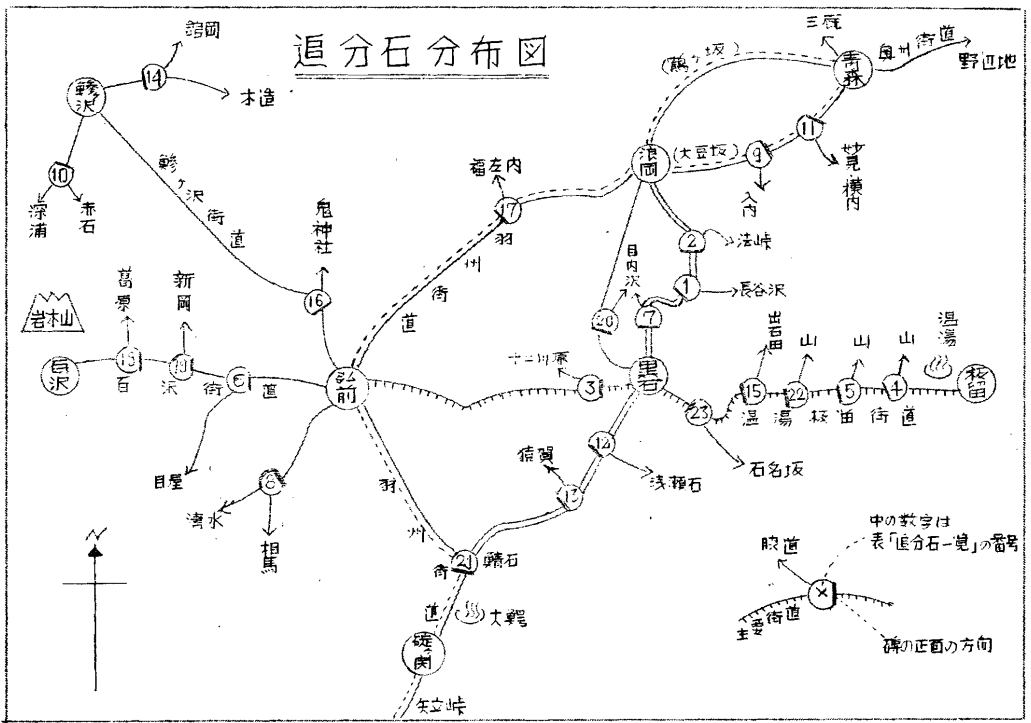
(2) 弘前―黒石―温湯―板留間

(3) 弘前から放射状の各街道

に求められる。いずれも当時の主要街道筋に相当するが、前述の如く新田地帯の小泊道、十三道に追分石がないのは開拓者の生活状態から考えて当然としても碓ヶ関―鯖石―弘前―浪岡間羽州街道未端部になかなかつたのは調査不足だけで片付けられず相応の理由を求めて良いと思う。

更に碑面の指示する方向から街道別分布状況を細見すると①の碓ヶ関―黒石―青森間では大豆坂を境にして、碓ヶ関黒石から青森に向う旅人が迷わぬように、青森からは弘前方面への旅客の便をはかり設置されている。

特に碓ヶ関―浪岡間は、津軽地方で最も古いと考えられる追分石があると同時に奥羽線開通以後のものが見出せない(3)、羽州街道の北端部、青森への直行道路として江



戸時代から鉄道開通に至る迄大きな役割を担っていたことを物語るのではなからうか。幕末における会津藩の松前出兵の帰途は青森より黒石を經由しており、「津軽道中譚」の喜次郎、弥太への旅が碓ヶ岡―黒石―大豆坂―青森へと進んでいる事など文献史料面からも弘前城下に所要のものを除きこの街道を通過する旅人が多かっただろうと推定することが可能である。明治初年秋田街道の名称のもとに駅が設定され重要視されていたことなど思い起し江戸時代における碓ヶ岡―黒石―浪岡經由青森街道の意義を再検討すべきではなからうか。

才二にあげた⑩弘前―黒石―湯田・板留間の追分石は碑面が弘前―黒石間の一基を除き他はすべて湯田・板留に向う温治客の便をはかつており、特に板留側三基は短区間毎に設けられ文字も本道と山道を明白に示しており旅客が山に迷い込むことの防止を意図している。江戸時代後半の庶民生活の一面―旅馴れぬ湯治客の増加を示しているとも云っても過言ではなからう。

以上に対し⑨弘前周辺の追分石は弘前から出発した人の便利を考えており、百沢・目屋、相馬・清水の如く同じ比重の道路分岐に立っている。この⑨が青森へ、⑩が湯田・板留への客を中心と考えているのと多少性格を異にすると云えよう。

分布上の特色を種々の面から検討して来たが最後に考うべきは黒石市周辺の追分石についてである。地域別街

追分石一覽

(註) (1)本文中①②とあるは本表の番号
(2)本表で?は判読困難を示す

番号	名称	所在地	主街道名	建設年代	建設者	追分石指示地名道名	追分道標以外の文字	備考
1	長谷沢追分	黒石市上十川 長谷沢神社入口前	碓氷 黒石 浪岡	正徳四年六月廿八日	養農院	追分石指示地名道名 右長谷沢不動滝道 左青青森海道	追分道標以外の文字 八幡の石三三三三三三	四角柱で他の ものと異なる 「追分」の使用
2	法峠追分	黒石市上十川 バス系統停留所前	碓氷 黒石 浪岡	文化二年	唯順院日宣	聖人舊跡法峠 徒是入東一里	南無妙法蓮華經	經文は 日蓮文字
3	匠子の木追分	黒石市豊岡 匠子野木部落西端	碓氷 黒石 浪岡	文化六年冬十月	石名灰打 題目講中	右十二川原 左弘前街道	南無妙法蓮華經 國中宗高年義死精尋七日匠者	經文は 日蓮文字
4	豊岡追分	黒石市豊岡 西口	碓氷 黒石 浪岡	天保四年四月八日	大瀬清八 賢田(運行)	右温湯板留道 左山道	南無妙法蓮華經為	經文は 日蓮文字
5	山形追分	黒石市花巻 神社前	碓氷 黒石 浪岡	天保四年五月	記入なし	右温湯板留道 左山道	岩木山大権現	
6	五代追分	岩木町五代 匠屋街道分岐点	碓氷 浪岡	弘化二年正月日	記入なし	右百澤街道 左目屋街道		
7	野添追分	黒石市野添北 端内分岐点	碓氷 浪岡	弘化戊申年三月	成田長四郎	右青森 左目内澤打道		
8	悪戸追分	弘前市悪戸 三差路	碓氷 浪岡	嘉永五年八月	頼主野次郎新山文助 讀中馬野原時盛郎郎 (他九名)	右往還 左入内道		
9	高田追分	青森市高田 追分松下	大豆坂 青森	嘉永六年三月吉言	一森村大谷乙吉 (他四名)	右大間越道 左赤石沢目道		
10	赤石追分	碓氷町赤石 國道と村道の分岐点	碓氷 浪岡	安政二年中秋	牛館村實隆正吉 (他二十五名)	右大間越道 左横内		
11	妙見追分	青森市妙見堂 付近の分岐点	大豆坂 青森	文政三年正月吉言	記入なし	右青森 左横内		
12	浅瀬石追分	尾上町高木 黒石市匠子野木間 原道	碓氷 浪岡	明治十九年六月	中伝渡村 宮川治五左衛門	右あけいし道 南猪首山道 北くろいし道		
13	荒田追分	平賀町荒田 中伝渡への分岐点	碓氷 浪岡	明治十九年十月十五日	左猿賀通 右青森通	右青森通 左猿賀通		

旧黒石藩主津軽英叙ノ開道ニシテ稻荷道ト稱之巾一丈五尺

と刻まれており以後建設の追分石はほぼ同様な性格を持つてゐる。又標示されてゐる地名、道跡名も大都市、寺社、温泉などでなく字石程度のもので、建設者は属志家へ豪農・村・青年団などが見られるが特に二次大戦前の碑文には地主階級が名を連ね戦後は村・公共団体が設置者となつてゐる。又後述の如き宗教的色彩を持つ追分石がほとんど見られないのもこの時代の大きな特徴と考へる。

一方明治二一三十年以前江戸時代の建設にかかるとは十二基八年代明白の追分のみを教えるが中でも他とかけ離れて古いものに正徳四年の①長谷沢追分がある。この追分石の特色は「海道」の文字の使用で文化以後の追分碑文には「街道」「××通」「××道」と云う表現が為されるのと眞を異にする。新井白石の主張により海のおい地方を通過する甲州海道、日光海道が甲州道中、日光道中と改められたのが正徳六年であることと機を一つにする奥奥味深い津軽領内の追分石については正徳一例しかなくしかも以後百年間の資料が空白であるため白石の方針が直ちに津軽領内に影響を及ぼしたとは論証し難い。

さて正徳以後の追分石設置は百年程途切れ文化年間以

隣県に進行する。通行量が多く経済力豊かな他地域には元禄以前のものが見られるが津軽地方には無く、この事が逆に前鎖的で交通量も少なかった津軽藩の交通状況を示すといえよう。

それでは何故江戸末期に至り追分石建設が行なわれたのであろうか。

オ一に挙ぐべきは道路の利用度が高まつた事である。北方守備をめぐる交通量の増加、一般旅行者——温泉湯治客、巡礼などの盛行が考えられ「津軽道中譚」の発刊は単に「東海道中膝栗毛」の模倣ではなく領内交通の活況を示す資料と思われる。幕末における公私旅行の増加は全国的傾向で津軽地方にもその風潮が急速に波及して来たと考えたい。

オ二には藩自体の交通政策の強化である。すでに享和から文化にかけて百沢、青森、鯉ヶ沢、又渡寺、草秀寺等の街道に並木の植付が行なわれ、伐採した者の処罰など並木の保護育成にも力をいれている。又文化三年には一里塚、十丁坑の改修を行なわせており交通土木行政には積極性が見られる。かかる事態はオ一にあげた道路利用度の増加に関連して発生したものであり追分石の建設はこのような藩当局の政策に刺戟され進行したものと推定し得る。

オ三は農民の間に石杵の使用が普及し種々の石牌が建

てられるようになつた時期と併せ考うべきである。農村地帯の石碑を調査すると墓石の使用は江戸後半に入つてからであり、百万遍塔は幕末に多く、天明飢饉の供養塔は文化初年に建てられている。庚申塔に関する研究は水館表三氏により進められ文化期以後の急増が報告されている。又下北半島恐山境内の石造物群についても同様な傾向が見られる。すなはち供養塔・狛犬・手洗盤などの建設・奉納の時期は寛政以後幕末に多く、就中田名部から山門迄の参道悉いに寄進された丁塚は安政四年から文久二年に至る四年間の建設である。注目目に価する。後述する如く追分石には供養塔や庚申塔を兼ねるもの、或いはそれ等の影響を受けているものなどがあり、又建設については世威住民の力に頼っていることなどから、津軽地方農民間に石造記念碑類の建設が行なわれた江戸後半一特に文化期以後に追分石が数多く建設されるのは当然と云える。

(四)

以上追分石が江戸時代後半に建設された原因を交通事情・交通政策・農村における石碑類建設の普及などの諸面から考察して来たがこれ等三桌に加え検討すべきは信仰・宗教などの関連である。ここで追分碑文をかかると、その建設は

4僧侶

.....② ③

- (ロ) 寺院 ①
- (ハ) 題目講・三十三観音講 ④
- の如く宗教関係が多く、更に民間信仰の種類別に分類すると

- (二) 日蓮題目の記載あるもの ②
- (ホ) 三十三観音に關係するもの ③
- (ヘ) 天明飢饉供養塔を兼ねるもの ④
- (ト) 岩木山、猿蓑など寺社信仰に關係するもの ⑤
- (チ) 庚申塔の形式の影響を受けていると考えられるもの ⑥

となり明治二十年迄の建設で宗教的色彩の無いのはわずが三例に止る。かかる状況は単に津軽地方だけでなく全国的な傾向下にあり、碑文から津軽地方にも江戸末期の巡礼や抜け参り等の流行が及び寺社参詣客が相当あつたことを推定し得るとともに追分石の建設が追分標識そのものためだけでなくこれ等参詣客に対する寺社側の宣伝や民間の信仰心の助けを借りて進化したことを知ることが出来る。そしてこの様な建設方法は明治二十三年頃まで続き以後は既述のとおり改修、開通記念等の形に変化するのである。

(五)

津軽地方の追分石はその分布面から見ると羽州街道末

端部における段々開一黒石一青森向直行道路の意義を示し、温湯板留街道の状況を物語っている。一方碑面からは江戸後一末期の交通状況や庶民生活の様相一三十三観音巡礼・飢饉供養・石碑類建設の能力およびその盛行等を教えてくれる。そしてこれ等追分石の建設された年代一文化期以後暫くが元禄期に次ぐ津軽藩の交通制度整備充実期に当るのである。

最後に追分石の現状について付記すると、近年主要道路改修工事が著しく進みそのため追分石は移転を余儀なくされている。中には二転三転の上相変らず役立っているもの、観光的価値を生じたものなどあるが、反面倒壊のまま放置されている例もある。この際江戸時代の交通遺跡として松並木などを含めた保護・保存策を考える必要のあることを主張し、小論を終りにたい。大方の御世評御指導がたいにければ幸いである。八本論は昭和四十年五月二日弘前大学国史研究会総会にて発表したもの弘前大学宮崎教授、弘前実業高校小館衷三氏の御教示を四筆補正の上完成したものである。誌上より厚くお礼申し上げます。V

八註V

- (1) 個々の追分石については別表、地図参照。
- (2) 地図参照。
- (3) 別表①長谷沢追分、正徳四年八後述V。

- (4) 青森一弘前同明治廿七年、全通は廿八年。
- (5) 高津堀川「終北録抄」八来遊諸家紀行集V
- (6) 一瓢舎半升、万延元年作。
- (7) 「新選陸奥国誌」。
- (8) 福左内(常盤村)菅原、新岡(岩木町)

- (9) 御触書寛保集成、道中筋之部正徳六年四月条
- (10) 日本経済新聞社編「街道今昔」による。
- (11) 御触書天保集成、道中筋之部文化四年十二月条、津軽藩日記、文化六年十月十四日条。

- (12) 要記秘鑑・津軽藩日記。
- (13) 「弘前市史」八藩政編・年表V
- (14) 岩木町入幅の塔は文化七年、弘前市最勝院のものは文化四年の建立である。

- (15) 小館衷三氏「近世津軽の庚申塔」八弘前大学国史研究三十二号所収論文V
- 栗村知弘・阿部浩三「三八地方の庚申信仰について」八東奥文化三十号所収論文V

- (16) 笹沢魯羊著「宇曾利百話」、および昭和三十九年八月現地調査による。
- (17) 前掲「街道今昔」には庚申塔に街道名地名等を刻んだ追分の存在を紹介している。東京板橋志打町II万延元・松戸市馬橋II文化三年。

- (18) 拙稿「信政時代における交通問題一土木事業を中心として」八弘前大学国史研究二十三号所収論文V